

【日本緩和医療学会第16回大会・発表演題】
**がんになった患者の子どもへの
病状説明に関する実態調査**
—その1 患者へのアンケート・量的分析—

大沢かおり¹⁾ 井上実穂²⁾ 小林真理子³⁾ 石田也寸志⁴⁾
小澤美和⁴⁾ 真部淳⁴⁾

1) 東京共済病院 2) 独立行政法人国立病院 四国がんセンター
3) 放送大学大学院 4) 聖路加国際病院

研究の背景

【研究の背景】

昨年日本緩和医療学会で発表した「がんの親を持つ子どもへの介入に関する実態調査～医療関係者へのアンケート分析(量的分析・質的分析)」では、医療関係者はなんらかの心理的支援を含めた介入をすべきと考えているにも関わらず、介入できていないことが明らかになった。介入困難な要因は、医療関係者側の要因と、患者側の要因とがあり、両者に対し、支援の大切さを伝えていくことと情報提供が必要であることが分かった。

今回の実態調査では当事者である患者が、どう認識・体験しているかを調査することにより、患者の思いやニーズ、患者から見た子どもの反応を明らかにし、患者・家族が望む支援のあり方を探る。

今回の実態調査の質的分析については下記の発表を参照

「がんになった患者の子どもへの病状説明に関する実態調査」

その2 がん患者が子どもに病気を説明する背景

その3 説明を受けた子どもの反応

昨年の研究内容についてはHope Treeのホームページで公開している

<http://www.hope-tree.jp>



研究目的と研究方法

【研究目的】

患者が子どもに病気を説明する実態を明らかにする。

【研究方法】

1. 対象と実施時期

がん診断時18歳未満の子どもを持ち、患者会や情報サイトを利用して、WEB・郵送アンケート調査に同意した患者。

2009年12月から2010年9月まで実施。

2. 調査方法

調査内容：

自己記入式アンケート調査。

選択肢を選ぶ方法と、自由記述によって回答してもらった。

3. 分析方法

説明をした状況に関しては、説明をした人132名を対象に分析した。

IBM SPSS Statistics Ver.18 を用いて統計分析を行った。

4. 倫理的配慮

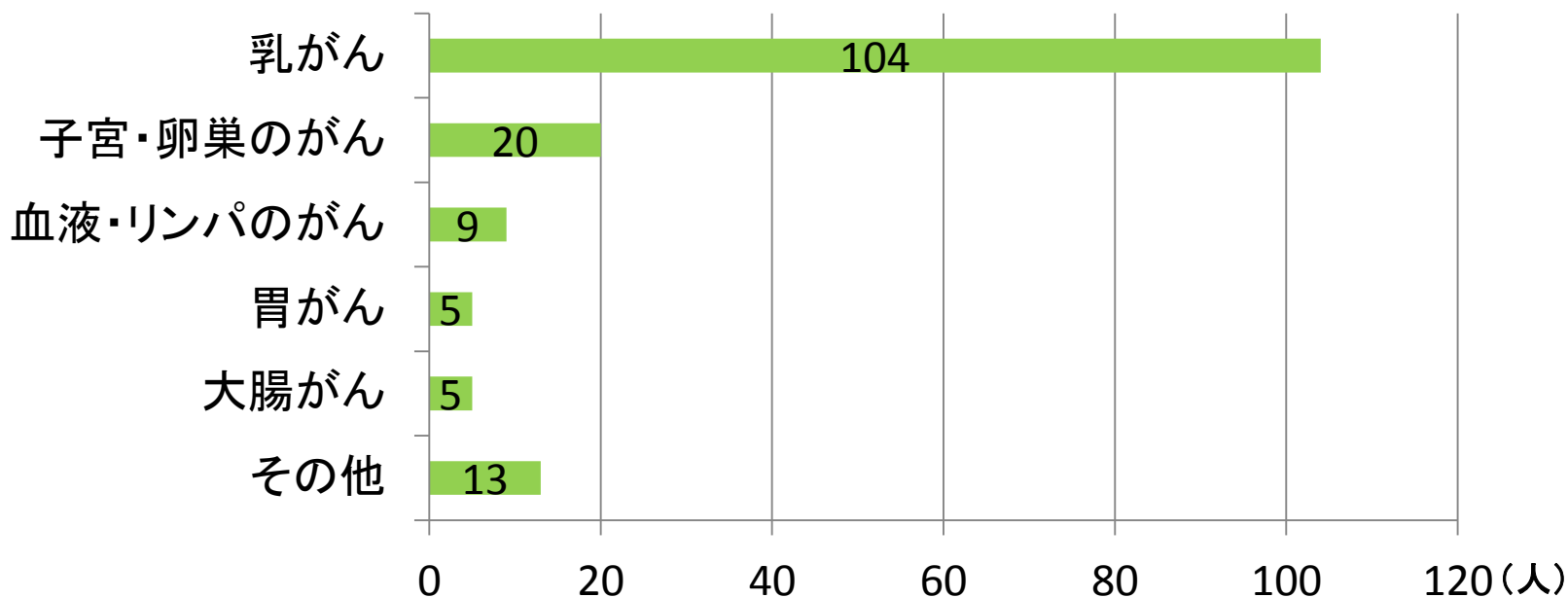
聖路加国際病院の倫理審査を受けて実施した。



回答者の属性

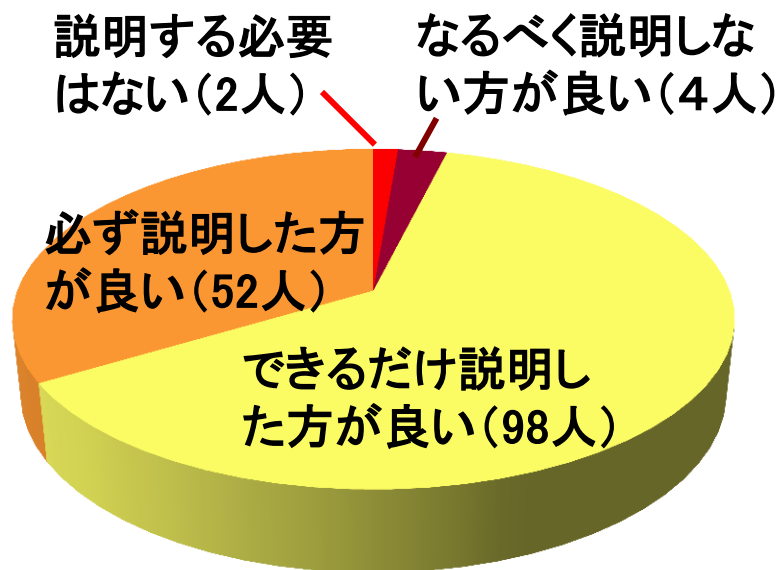
回答者数： 156名（全員女性）
 回答者の平均年齢： 44.1歳
 子どもの平均人数： 1.9名
 告知時第1子の平均年齢： 12.3歳
 発症から話すまでの期間： 6.7ヶ月

がんの種類

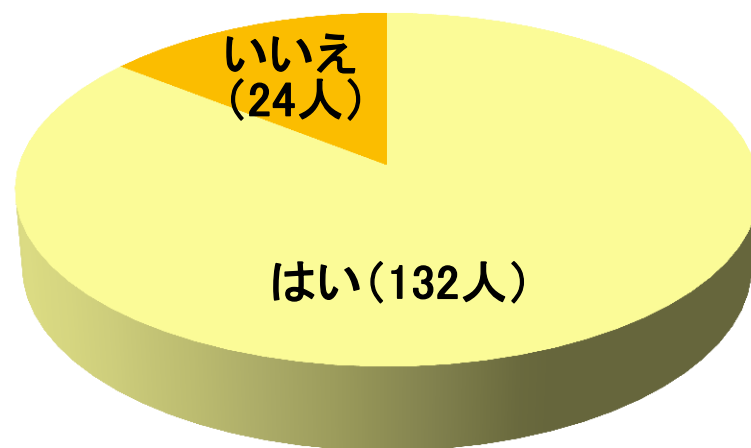


説明の状況

ご自身の病気をお子さんに説明することについて、現在どのようにお考えですか？

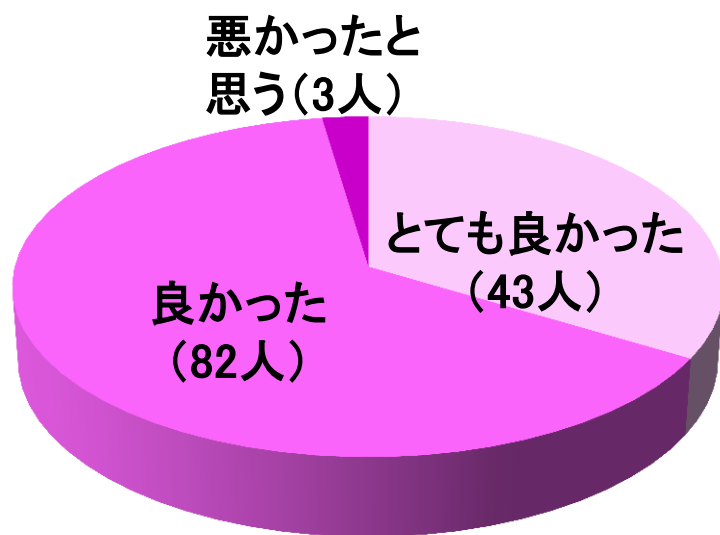


あなたはお子さんに病気のことを説明されましたか？

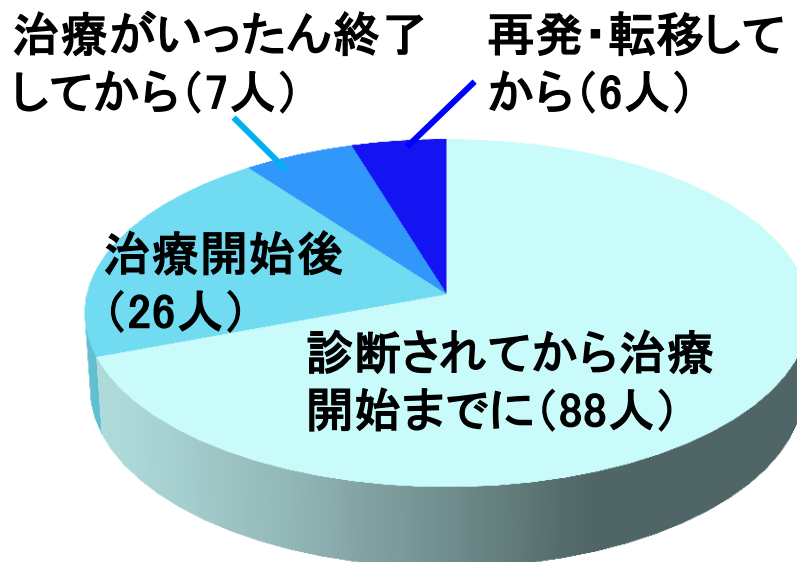


説明をした状況の実際

病気のことを説明してどの
ように感じましたか？

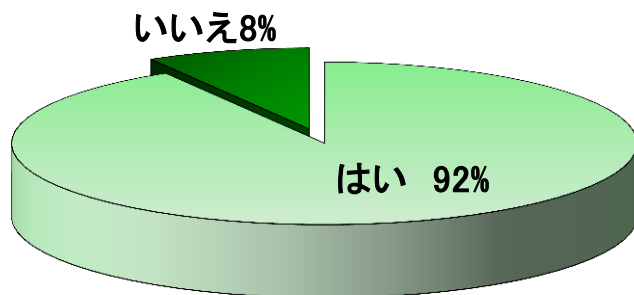


いつごろ説明しましたか？

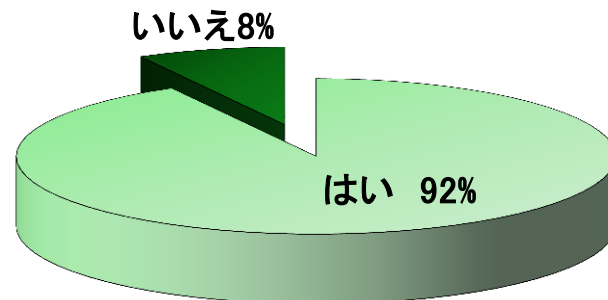


「病気のことを説明したかどうか」と「現在の状態」

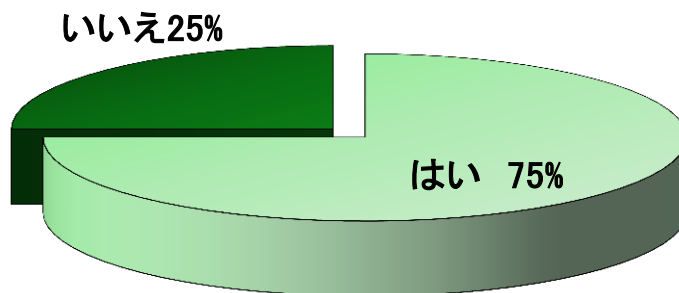
初発



再発転移



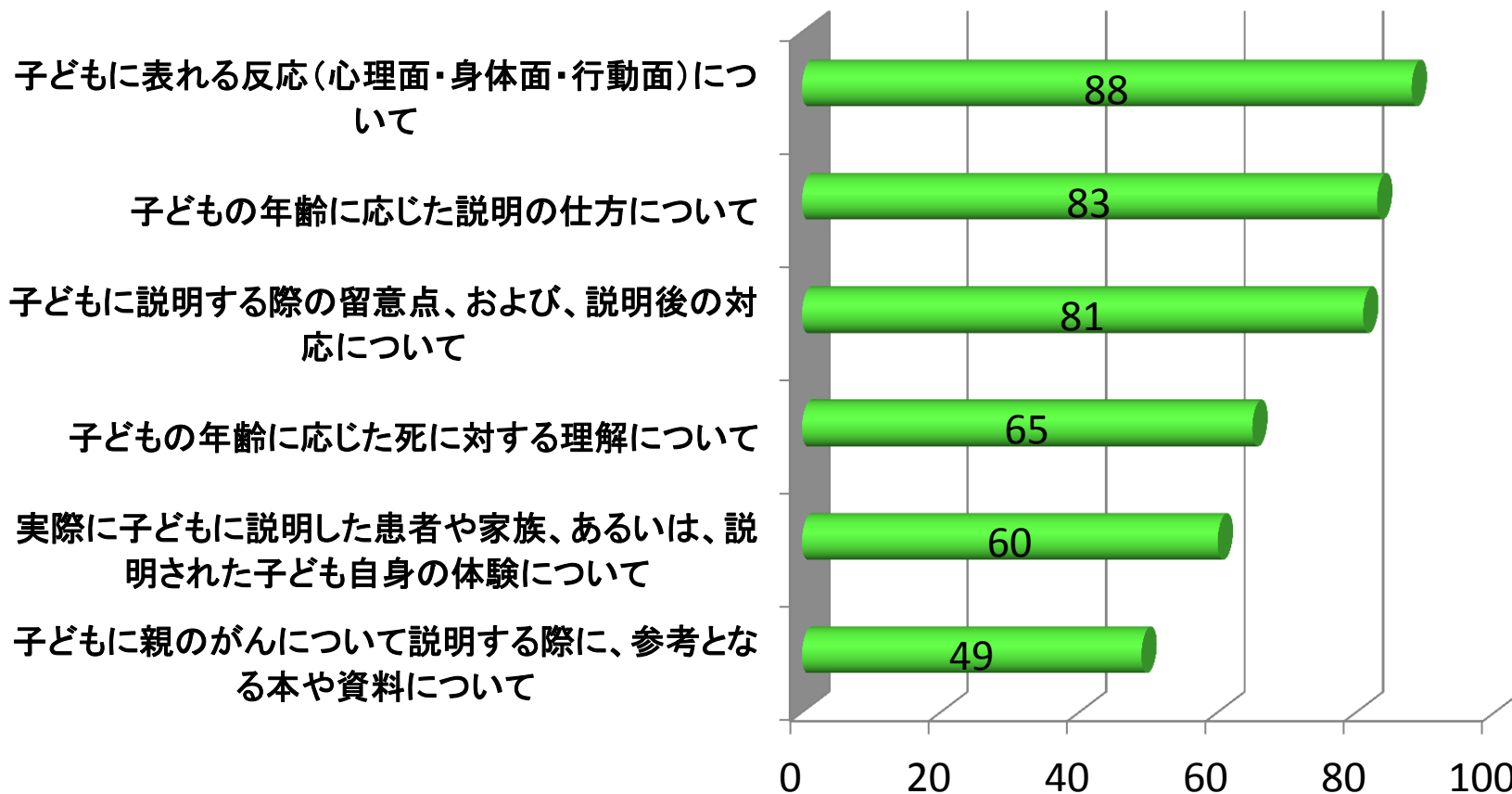
経過観察



経過観察に入る時点までに説明していないと、そのまま説明しないままの方が若干多い。初発、再発転移後に関わらず治療中の方は約9割伝える。



参考にしたい事柄や知りたい情報(複数回答可)



説明の方法

- 説明の方法については、「がんという言葉を使った」人は100名で64.5%、「病気という言葉を使った」人は49名で31.6%、「その他の言葉を使った」人は16名で3.9%であった。（人数が156人名を超えているのは、兄弟の年齢等によって異なる説明をした回答者が居るため。）
- 子どもの男女差による伝える割合は、どのがんの種類でも違いはなかった。



考察

- 今回の回答者のように、比較的積極的に情報収集する患者層では、子どもにがんのことを、「がん」という病名を使い、治療開始前までに伝える方が多く、また伝えたことについて97%の患者が「良かった」あるいは「とても良かった」と考えていることが分かった。
- 子どもの特徴や、実際に子どもに伝えた患者の体験、実際に伝えた後の子ども反応について知りたいという希望が高いことも分かった。今回の結果は、今後子どもに自分のがんを伝えることを検討している患者にとって、そういった情報を知ることができる貴重な資料になると思われる。
- 未成年の子どもとのコミュニケーションについて情報を得たいと考えているがん患者が参考にでき、医療者、教育・福祉関係者、子どもの周囲の大人の啓発にもつながる情報発信を続けていくことは大切だと考えられる。

【今回の研究の限界】

- 今回の調査は、がんに関する情報を比較的積極的にWebや患者会を通じて得ている患者が回答者であったため、未成年の子どもがいるがん患者全般の平均的な意識を表しているとは言い難い。
- 今回の調査結果から、84%の回答者が子どもに自分のがんのことを伝えていた。これは、自分の現状を良いと感じており、自分のことを伝えたいと思う方が回答者になっているためと考えられる。



結語

回答者は、自身のがんに向き合いながら、子どもを大切に考えて誠実に対応しようとしていた。

医療関係者はそういった患者・家族を理解し、悩みや不安があれば医療の場でも相談できるとのメッセージを伝えつつ、情報収集し、より良いケアを提供できるように研鑽していくことが大切である。

本調査研究は下記の研究費助成を受けて実施いたしました。

- * 平成22年度 厚生労働省科学研究費補助金(がん臨床研究事業)「働き盛りや子育て世代のがん患者やがん経験者、小児がんの患者を持つ家族の支援のあり方についての研究(研究代表者:真部淳)」
- * 平成22年度 財団法人笹川記念保健協力財団・ホスピス緩和ケアにおけるQOLの向上に関する研究助成「がんを持つ親の子どもの支援に関する研究」

